

IV-222 広島市太田川市内派川のイメージ解析(その1)

地域振興整備公団

正会員

小野 親一

東京工業大学工学部

正会員

中村 良夫

東京工業大学大学院

矢田 努

1はじめに 都市化の進行による河川周辺の環境の大きな変化にともない都市内河川の改修が進む中で、都市における貴重なオープンスペースとしての河川空間の役割の認識が高まり、河川の計画のあり方が様々な面から問われるようになってきた。河川周辺の住民の日常生活の面から河川機能のあり方を総合的に検討する必要があるといえよう。そこで、河川空間の環境計画のための資料を得ることを目的として、広島市内を流れる一級河川太田川と派川に対する市民の意識の構造と、河川上の地点及びそのまとまりの特性について、事例研究を行なった。

2調査 白黒のパノラマ写真を付した質問紙によるアンケート調査を行なった。

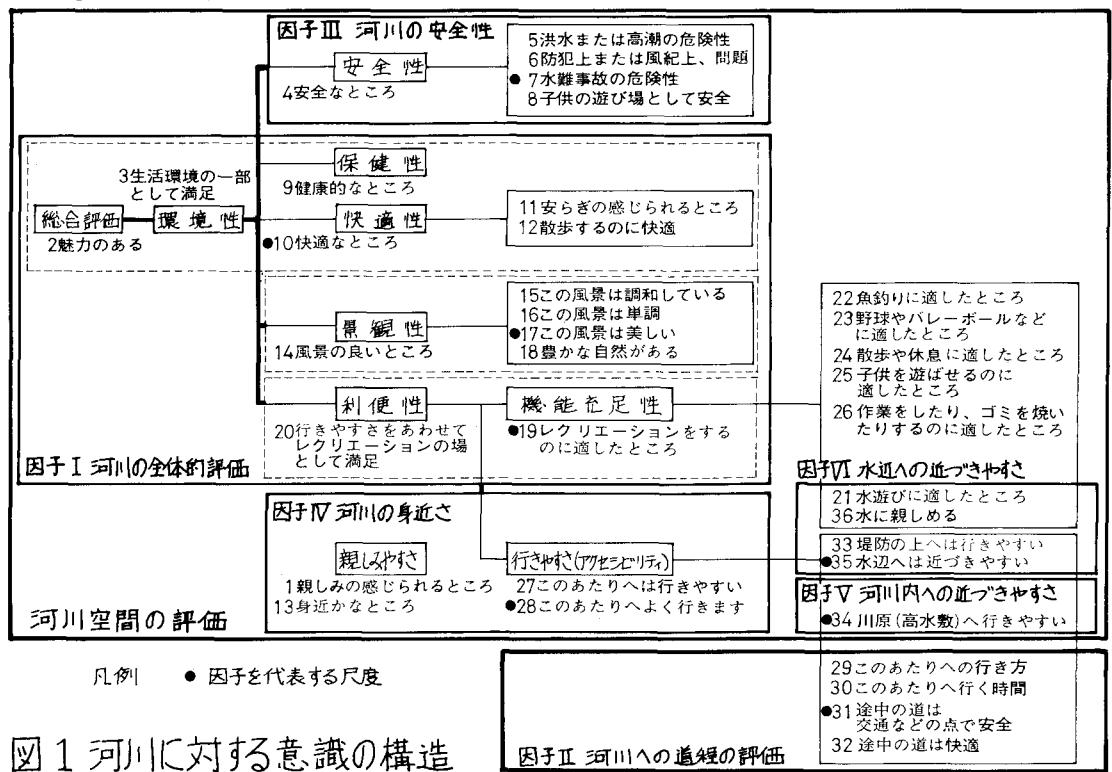
2-1. 調査内容と評価尺度 都市河川に関する意識の構造を図1の様に仮定し、総合評価、快適性等に関する調査項目36項を系統的に選択した。評価尺度は

Semantic Differential法に準じて、反対の意味をもつ言語を両極にもつ2段階評定尺度とした(図4)。^{*1}

2-2. 調査の対象 調査の対象範囲は広島市内の三角州地域全域で、これを分割して調査対象地区を42とした。調査対象者は各地区に居住する満16才以上(昭和51年11月27日)の広島市民より2段階無作為抽出した。

2-3. 調査の実施 昭和51年12月11日~13日に調査を実施した。地域的評価用1809票、広域的評価用205票を配布し、回収率は各々78%、75%であった。

3調査の結果と分析 得られたデータをもとに因子分析を行なった。直接バリマックス法による解を比較すると、地域的評価と広域的評価の構造に顕著な相違は見出されない。顕著な3因子(I~III)とあまり顕著でない因子(IV~VI)が得られ、仮定された意識構造のモデルにより容易に解釈された(図1)。主因子解では2つの因子のスコアが独立の因子として抽出された。河川へ



0.8 第1因子軸 (因子負荷量: 0.35)	
安らぎの感じられるところ	11
快適なところ	-10
健康的なところ	9
魅力のあるところ	20
生活環境の一部として満足	3
子供を遊ばせるのに適したところ	15
この風景は調和している	4
安全なところ	4
親しみの感じられるところ	8
身近なところ	13
△	0.4
△	27 このあたりへ
△	5 洪水または高潮の危険性
△	7 水難事故の危険性
△	28 よく行きます
△	33 川原へは行きやすい
△	16+ この風景は単調
30時間	-0.4
0.0	0.4
0.8	0.8

例 (I) 河川の全般的評価 (II) 河川への道徳的評価 (III) 河川の安全性 (IV) 河川の身近さ (V) 河川内への近づきやすさ + その他

図2 河川に対する意識の構造 (地域的評価主因解釈)

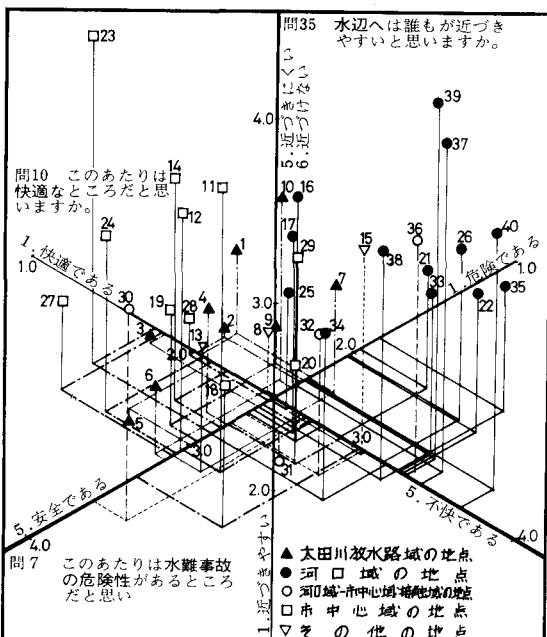


図3 河川地点の意識評価

表1 尺度間の関連
(ワームのコンテンジエンス係数の平方根)

10 快適なところ	17 この風景は美しい	19 レクに適した	31 中の道は安全	34 川原へ行きやすい	35 水辺への近づきやすさ	28 よく行く	7 水難事故の危険性	10	17	19	31	34	35	28	7
.81								.81							
.60	.72							.60	.72						
.15	.15	.05						.15	.15	.05					
.35	.47	.43	.10					.35	.47	.43	.10				
.40	.20	.31	.05	.37				.40	.20	.31	.05	.37			
.10	.10	.11	.35	.35	.00			.10	.10	.11	.35	.35	.00		
.20	.31	.08	.35	.19	.09	.11		.20	.31	.08	.35	.19	.09	.11	

問1 このあたりは親しみの感じられるところだと思いますか。

- 親しみが感じられる
- やや親しみが感じられる
- どちらともいえない
- やや親しみが感じられない
- 親しみが感じられない

図4 質問項目の形式

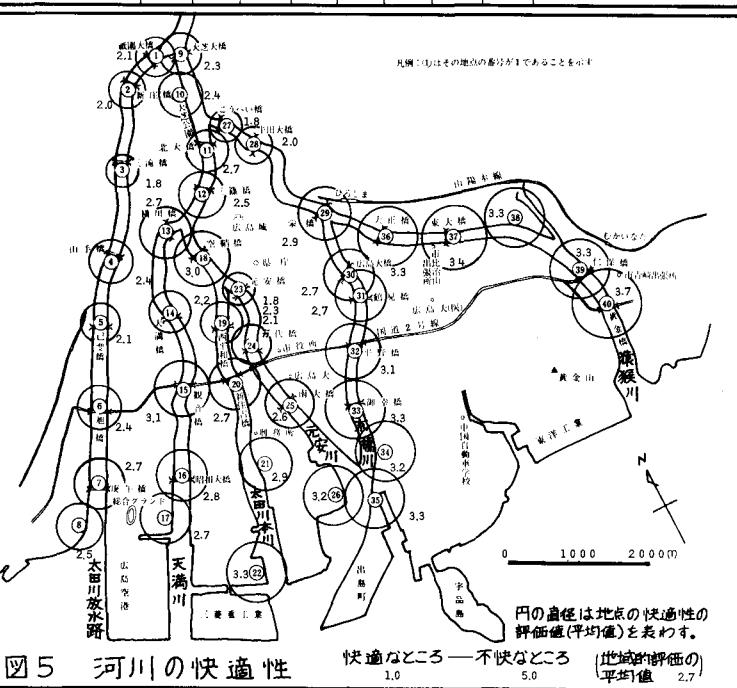


図5 河川の快適性

の道程の評価(第2因子)は河川空間に開むる他の尺度とはかなり異なる性格をもつといえる(図2)。次に各因子を代表する尺度を選択した(図1)。各尺度による地点のスコアをもとに地点間の関係をみると、△の地点は大きく3群(太田川放水路上、三河口側、及び市中南部)に分類され、特徴が把握された(図3 第1因子を代表する尺度(河川の快適性)による地点の評価平均値を図3に示す)。

この地点分類が、河川空間の物的特徴による分類及び河川地点の誤記関係にもとづく分類(次報参照)と良く対応することは興味深く、

4まとめ 河川に対する広島市民の意識構造のモデルをつくり、河川地点の特徴を把握した。

*1 間28と35は6段階のカテゴリ尺度でし、間29は河川地点に至るまでの距離をデータ化した。

*2 河川地点における体重や歳地区的の居住者による評価を地域的評価、違う地区的居住者による評価を地域的評価、両者を合せたものを多角評価とする。

*3 尺度間の関連は表1に示す通りである。本研究は建設省太田川工事事務所によって得た機会を与えたものであり、記して謝意を表す。次第である。